
ディエゴ・リベラの「パン・アメリカ主義」
— 《この大陸にある北と南の芸術表現の結婚》（1940年）におけるメキシコの文明の表象 —

20世紀メキシコを代表する画家ディエゴ・リベラは、1930年代以降アメリカ合衆国で数次に渡り大規模な壁画を制作した。1940年、サンフランシスコのゴールデンゲート万博のために制作された《この大陸にある北と南の芸術表現の結婚》は、その最後の作品である。メキシコの土着文化と、アメリカ合衆国の機械文明のイメージを組み合わせ、「南北アメリカの融合」を表現したこの壁画の中央には、アステカの女神像と巨大なプレス機を合成したリベラ独自の神像のモチーフが描かれた。本発表は、このリベラ独自の神像と、その図像源泉とみられるコアトリクエ像の相違点に着目し、リベラがこの特異なイメージに託したメッセージを考察する。壁画《この大陸にある北と南の芸術表現の結婚》は、画家の芸術的関心や個人的思想だけでなく、第二次世界大戦前夜の合衆国において、メキシコ美術が担わされた政治的役割と深く結びつくものであった。

19世紀終わりから合衆国は、南北アメリカの政治・経済の地域連合を目指す、いわゆる「パン・アメリカ主義」政策を進めてきた。特にフランクリン・ルーズヴェルト大統領（在職 1933-1945年）の善隣外交政策は、第二次世界大戦勃発以降、合衆国の文化政策にも多大な影響を与えた。ネルソン・ロックフェラーが統括するアメリカ大陸間問題事務局（The Office of Inter-American Affairs）は、ラテンアメリカ諸国との戦時協力体制確立のために、展覧会をはじめとする文化交流事業を活発に展開した。ゴールデンゲート万博の美術展示もまた、南北アメリカの先住民美術を扱った「西半球の先住民文化」展、ラテンアメリカ各国の現代美術を紹介した美術館の展示など、この「パン・アメリカ主義」の高まりを反映していた。このような合衆国とラテンアメリカの歴史的状況は、リベラの作品構想の背景をなすものであった。

一方、リベラは1933年にロックフェラー家注文の壁画にレーニンの肖像を描いて以来、合衆国での壁画の注文を失っており、サンフランシスコに渡った当時、合衆国の美術界での活動再開を計画していた。彼はまた、合衆国のパトロンとの関わりを経て、自らが代表するメキシコ人画家の招聘が、米墨間の緊張を緩和する政治的な目的を持っていたこと、「南北アメリカの融合」がその中で有効に機能するイメージであることも理解していた。その上で彼は、中央の神像のモチーフのイメージを巧みに操作することによって、征服以前のメキシコの文明を、生け贄の儀式や戦争とは正反対の平和な文明として描いた。それは時代が要請する「パン・アメリカ主義」の言説に相応しい「南のアメリカ=メキシコ」の文明のイメージだった。

壁画《この大陸にある北と南の芸術表現の結婚》は、リベラが自身の合衆国の美術界での地位回復を託しつつも、善隣外交政策の時代に求められていた「南北アメリカの融合」という芸術的ビジョンを、モニュメンタルな形で実現した作品だった。